

# 近代日中の翻訳百科事典について

石 川 禎 浩

|                                              |     |
|----------------------------------------------|-----|
| は じ め に .....                                | 277 |
| I 明治日本における翻訳百科事典<br>——文部省版『百科全書』 .....       | 278 |
| II 清末中国における翻訳百科事典<br>——会文学社版『普通百科全書』 .....   | 284 |
| III 近代日中における『エンサイクロペディア・<br>ブリタニカ』 .....     | 291 |
| 東アジアの近代概念語に見えるデファクト・スタンダード<br>——結びにかえて ..... | 296 |

## は じ め に

---

今日、我々の書く普通の学術論文が百科事典のしかじかの項目を典拠として挙げることはまずない。百科事典の記述は、既存の知識の集成に止まるがゆえである。すなわち、新事実の発見や新たな論証を尊ぶ学術研究においては、百科事典は「引く」（参照する）ものではあっても、「読む」ものとは想定されていないのである。しかしながら、多くの事象について、その既存の知識なるものが決定的に欠けていた時代、あるいはその知識の体系がそもそも成立していなかった時代には、百科事典（Encyclopaedia）は知識の体系そのものを体現する、「読む」ための書物であった。日本で言えば明治初期、中国で言えば清末は、そうした未知の知識体系の摂取が急務とされた時期であり、いわゆる百科事典の歴史はこの時期に始まる。それは学術諸領域、まさに「百科」の再編と同時進行したものであった。

もとより、東アジアにおける「百科事典」(百科全書)<sup>(1)</sup>の誕生と発展の歩みについては、中国についても日本についても、かなり豊富な研究が積み上げられている。その代表的な

ものは、鍾少華氏の一連の研究<sup>(2)</sup>とドイツ・ハイデルベルグ大学で行われたプロジェクト研究<sup>(3)</sup>である。いずれも近代における日中両国の百科事典全般を視野にいれ、その比較検討を行った点で高い水準を持つものであり、本稿の記述もこれら先行研究に多くを負っている。ただし、それらの研究は、近代日中最初期の翻訳百科事典——日本の文部省版『百科全書』、中国の会文学社版『普通百科全書』（編訳普通教育百科全書）——を「過渡期」の産物と見なし、比較的簡単な紹介をするにとどまっているため、本稿では、奇しくも日中両国でそれぞれ「百科全書」の語を初めて書名に冠した翻訳百科事典を比較検討する。翻訳百科事典に盛られた訳語や新知識、さらにはそこに表現された学知の体系は、それが「過渡期」の百科事典であるがゆえにこそ、翻訳概念の定着に極めて大きな役割を果たしたと考えられるからである。

そのさい、個々の訳語や翻訳概念の定着は、それぞれの訳語の善し悪しもさることながら、それら訳語を掲載した媒体（雑誌、単行本、辞書）の発行量、流通量に大きく左右されることに鑑み、翻訳百科事典の発行・流通の量的側面に留意して、日中の比較を行う。また、日中両国で国産の百科事典が生まれるまで、あるいは生まれて後も、西洋学知の集大成と崇められた英語版百科事典『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（*Encyclopaedia Britannica*）の日中での販売状況も付随的に紹介する。日中におけるその販売状況の違いを通して、両国の外来知への関心の持ちようの違いを描き出さんがためである。

## I 明治日本における翻訳百科事典——文部省版『百科全書』——

日本における百科事典の起源は——近世以前のいわゆる「類書」を除外すれば<sup>(4)</sup>——19世紀初めに蘭学者が翻訳・編纂した「厚生新編」、あるいはやや下って明治維新後の1870年より、西周が福井藩士の教育のために私塾の育英舎で行った「百学連環」と題する講義に求められる、というのが通常よく言われるところである。ただし、江戸幕府の蕃書和解御用が翻訳した「厚生新編」（フランスのショメール〔Noël Chomel〕による『家事百科辞典』のオランダ語版をもとに、蘭学者たちが前後30年ほどにわたって和訳したもの）は逐次幕府に献上されはしたものの、長らく世に知られることはなく、1937年にたって翻刻・刊行され、ようやくその存在が注目されるに至ったものである<sup>(5)</sup>。また、西周の百学連環講義にしても、1932年に筆録本が発見されるまで、その存在はごくごく限られた者の間でしか知られていなかった<sup>(6)</sup>。したがって、明治初年において、世上にその存在が知られ、何らかの読者を得た西洋型の百科事典としては、まず1873（明治6）年より足かけ10年ほどの歳月をかけて出版された文部省版『百科全書』を挙げなければならない

のである<sup>(7)</sup>。

維新このかた、明治新政府の文部省は、急ごしらえで学校教育に必要な様々な書物の翻訳、編纂、刊行にあたったが、それら刊行物の中で、最も大がかりなものの一つが、当時の通俗版英語百科事典の代表たる *Chambers's Information for the People* の翻訳、すなわち「百科全書」の刊行であった。往時しばしば「チャンブルの百科全書」<sup>(8)</sup> と呼ばれたものがそれである。この翻訳事業を中心になって進めたのは、1871年に文部省の編輯寮頭を、ついで同翻訳局長をつとめた箕作麟祥であった。

箕作麟祥（1846–1897）の名は、ナポレオン法典をはじめとする西洋法律関連書の翻訳者として、すでに法学史などの領域に確固と刻まれている<sup>(9)</sup>。傑出した蘭学者として幕臣にも取り立てられた箕作阮甫を祖父に持ち、早世した父箕作省吾に代わって、幼少から漢学を含めその祖父から手ほどきを受けた麟祥は、家学の蘭学のほか、英学を修めた。十代半ばにして、祖父阮甫が教授をつとめた幕府の蕃書調所で英学を教え始め、二年後にその後身たる開成所の教授見習となったときには、すでに30–40歳くらいの人のようであったというから、その早熟ぶりが知れよう<sup>(10)</sup>。のち1867年に徳川昭武の随員として渡仏してフランス語も習得し、明治元年に帰国の後は、その類い希なる洋学（語学）の才によって明治政府に仕えた。フランスの刑法を皮切りに、民法、商法、民事および刑事訴訟法、憲法を次々に翻訳し、西洋の法律を初めて体系的に紹介した功績は改めて言うまでもないが、それら翻訳の苦心の過程で、西洋起源の概念語自体の訳語を創出したり、定着させるのに貢献したことも特記しておくべきだろう。何せ、万事が「訳語なきに困却し、漢学者に聞けとも答ふる者なく、新に作れば、さる熟語はなしとて、人は許さず」<sup>(11)</sup> という状態だったからである。

こうした訳語案出のさい、かれがある程度漢学の素養を持ち、また中国語に翻訳された西洋書にも明るかったことが大いに幸いしたことは、かれ自らが講演の中で次のように語っている。

其本は実に、分らないことだらけでありました。また、分つても、翻訳語が無いので困りました。権利だの、義務だのと云ふ語は、今日では、あなた方は、訳のない語だと思つてお出ででありませうが、私が翻訳書に使つたのが、大奮発なのでござります。併し、何も私が発明したと云ふのでは無いから、専売特許は得はしませぬ（喝采、笑）。支那訳の万国公法に「ライト」と「オブリゲーション」と云ふ字を、権利義務と訳してありましたから、それを抜きましたので、何も盗んだものではありません。また、新規に作りましたのは、動産だの不動産だのと云ふ字で……<sup>(12)</sup>。

ここで箕作が述べる「権利」「義務」が漢語版の『万国公法』に由来するという説明にはなお検討の余地があるようだ<sup>(13)</sup>が、翻訳語そのものがなかった当時であって、漢学・洋学両方の知識を駆使し、新たなる語彙から知識体系に至るまで、西洋文明の万般移入に打ち込んだ箕作の苦心は改めて評価されてよからう。黎明期の法学を論じる時に常に引用される穂積陳重『法窓夜話』が、「西学輸入の卒先者たる諸先輩の骨折」について、「明治の初年に於ける法政学者が、始めて法政の学語を作った苦心も、亦た実に一通りではなかった。就中泰西法学の輸入及び法政学語の翻訳鑄造に付ては、吾人は津田真道、西周、加藤弘之、箕作麟祥の四先生に負ふところが最も多い」<sup>(14)</sup>として、わざわざ箕作の名を挙げるのは、それゆえに当然と言えば極めて当然なのである。

さて、その箕作がとりくんだ「百科全書」であるが、かれの法典翻訳の業績の大きさからすれば、文部省翻訳局長時代にたずさわった「百科全書」の翻訳刊行は、その生涯における小さなエピソードと見られがちである。事実、「百科全書」の翻訳経緯については、それを伝える資料も多くはない<sup>(15)</sup>。ただし、日本初の「百科全書」自体については、書誌学の面でも、また語彙史の面でも、しかるべき研究がすでに世に問われている<sup>(16)</sup>ので、それらを参照しつつ、この「百科全書」の意義について私見を述べておこう。

前述のように、「百科全書」は、箕作麟祥の差配のもとで、イギリスの啓蒙百科書 *Chambers's Information for the People*（以下、CIP と略記）を分担翻訳したものである。CIP はイギリスの代表的教育叢書出版社であった W. & R. Chambers が、そもそも小冊子スタイル（分冊）で刊行したシリーズを、その後合訂本（2巻本）としたものである<sup>(17)</sup>。箕作らが翻訳にさいして用いたのは、1867年にアメリカで刊行された版本と見られる<sup>(18)</sup>。2巻本の CIP は、同体裁ではあるがそれぞれに異なるタイトル（内容）の小冊子を合訂したというその成り立ちゆえに、形式としては大項目の百科事典であった。すなわち、天文学（Astronomy）、言語（Language）、さらには家事の知恵（Household Hints）といった大きな学科のあらましが、全項目それぞれ16ページ（一部の項目は32、48、64ページ）にわたって記述されているのである。項目数は全部で92だが、項目自体がアルファベット順に配されているわけではないから、形式的には叢書を合訂したもので、我々が「百科事典」と呼ぶ小項目主義のものとは相当に異なる。ただし、西洋における大まかな学問・知識分野ごとに、そのあらましを大衆向けに平易に解説した同書は、まさにその学知吸収の最初の段階にあった日本には、打ってつけの書物であった。

2巻本の CIP、具体的にはその1867年のフィラデルフィア版が、いつ、どのような経緯で日本に（具体的には箕作のもとに）もたらされたかは、不明である<sup>(19)</sup>。明治初期に『泰西農学』（1870年）を翻訳した緒方儀一は同書の附言で、翻訳にあたって大学南校の

「チャムブル」氏カ学藝集成韻府」を参照したと述べている<sup>(20)</sup>が、その「学藝集成韻府」なるものが CIP であるとすれば、アメリカでの出版から3年ほどのちには、箕作のすぐ近くに同書があったことになる<sup>(21)</sup>。そもそも CIP は、その類似版の啓蒙教育叢書 (Chambers's Educational Course) の何冊かが、福沢諭吉らによって明治初年に翻訳されていたように——例えば、福沢諭吉『西洋事情外編』(1868年)は「チャンブル氏の経済書」、すなわち *Political Economy for Use in Schools, and for Private Instruction* (Chambers's Educational Course, W. & R. Chambers, 1852) を下敷きにしていた<sup>(22)</sup>——洋学人士にとっては、早くからかなり知られた啓蒙書に連なるものだったのである。

CIP の翻訳は箕作の差配のもと、多くの洋学者を動員して1871(明治4)年から始まり、2年後の1873年から1883年にかけて、項目ごとに木刻和綴じ本の分冊で、のちに活字印刷の洋装本の体裁で、文部省から「百科全書」として刊行された(図1)(項目として計91篇)<sup>(23)</sup>。

CIP 原載の項目はほぼすべて翻訳された。ただし *English Grammar* だけは、恐らく和訳の性質になじまなかったためだろうが、結局最後まで翻訳されなかった。「百科全書」の名称は、この書物によって初めて登場したもので、原書の項目数がおおよそ百に近かったことによるのではないかと考えられる<sup>(24)</sup>。つまり「百科全書」は、その原著が *Encyclopaedia* ではなかったことからもうかがわれるように、*Encyclopaedia* の訳語として案出されたのではなく、おおよそ「百」の「学科」に関する概説を集めたもの(全書)と

いう原著 CIP の書物としての性質を言い表したもののなのである<sup>(25)</sup>。むろん、先にも言及した西周の「百学連環」の方は、明確に *Encyclopedia* を念頭に置いて作られた言葉であったから、共に明六社の同人であった西と箕作の間に何らかの知識のやりとりがあった可能性はあろう。ただし、諸学を「百」で括る考えは共通していても、西が“Encyclo-”の部分で「連環」にしたような配慮は、「全書」の語からはうかがえないのであって、やはり諸学に関する文章の集成が「百科全書」の原意であっただろう。文部省版「百科全書」ののち、日本では同様の大量項目分類の諸学概説書の集成が、民間出版社によって往々「〇〇百科全書」の名で出版されたため、それが *Encyclopaedia* の訳



図1

語に転じていったと考えられる。それゆえ、いわゆる叢書（シリーズ本）と百科事典（百科全書）の境界は、実ははなはだ曖昧なのである。ちなみに、「百科全書」といえば、その元祖と見られることの多いフランスのディドロ（Denis Diderot）らの書物を「百科全書」と呼び、かれらを「百科全書派」と呼ぶようになるのは、文部省版「百科全書」の刊行よりかなり後のことである<sup>(26)</sup>。

さて CIP は、それが刊行された英米では、確かに手頃な諸学の解説書ではあったが、そうした学問体系がそもそも成立しておらず、また諸学理解のための訳語も備わっていない当時の日本では、その翻訳自体がかなりの難事業であった。政府外の洋学者もその専門分野にかかわらず動員され、箕作自身も Education の項（教導説）の翻訳を、またのちに日本初の近代的国語辞典『言海』を編纂し、また関係者からの聞き取りをもとに『箕作麟祥君伝』を編纂・執筆することになる大槻文彦も、Language（言語篇）、Printing-Lithography（印刷術及石版術）の翻訳を担当している。こうした訳者は50人を超え、校訂者も17人を数える。「最も完全に英語を話し得るもの」、「翻訳しに、此世に生れて来たやうなもの」<sup>(27)</sup>と称賛された箕作などはまだしも、「賃訳」の名の下で、英学の水準も専門も異なる者がそれぞれに各冊の翻訳を請け負ったため、「一事物にして数様の訳語を帯び、区々として一定せざるもの」<sup>(28)</sup>が多かったり、「中には、サツぱり文意の通ぜざる悪本」が混じったりするという「速成杜撰」の弊は免れがたかった<sup>(29)</sup>。

ただし、「誤訳を恐れず速訳せよ」（江藤新平）という当時の時代的要求に鑑みれば、それのみを以て本書の価値を計ってはなるまい。「百科全書」翻訳にまつわる具体的な状況、例えば、箕作が訳語案出に窮すると、辻士革なる漢学者が箕作の求めに合うような字句を工夫したというような興味深いエピソード<sup>(30)</sup>も含め、『箕作麟祥君伝』には若干の逸話が収められているので、詳細はそちらにゆずることとし、ここで強調しておきたいのは、この「百科全書」が文部省版の刊行で終わったわけではなく、有隣堂、丸善といった民間書肆がその刊行を引き取り、継続したことである。

文部省は、分冊体のものの刊行がなお続いていた中、1877年より6年ほどをかけて、それら既刊分を20冊の合訂本（活字印刷の洋装本）に編纂し直して刊行したが、合訂本版の全巻刊行がなると、「百科全書」はタイトル、体裁もそのままに、1883年より有隣堂なる書肆より翻刻されている。また、丸善商社からも、12冊にまとめた合訂本が1883年から翌年にかけて、さらに3冊にまとめた合訂本が1884年に刊行された。二種の丸善版は、それぞれ1885年には別冊（索引）が加えられたので、13冊本、4冊本となった。このように、1883年以降、「百科全書」の刊行が民間出版社に広まっていったのは、文部省が翻刻市販を正式に許していたからである<sup>(31)</sup>。さらには、いわゆる明治10（1877）年の官制改

革を受けて、文部省は「かくて後、教科書以外の編纂は漸く之を廃し、主として編成にのみ従ふに至れり」<sup>(32)</sup> というから、それ以降、教科書とは言い難い「百科全書」の出版業務自体からは手を引いたと見られる。

ただし、有隣堂や丸善は、体裁不揃いなる文部省版「百科全書」をそのまま翻刻して事足りりとしたわけではなかった。例えば、丸善版では6項目分が新たな訳者によってCIPの最新版から翻訳し直されている。その際の丸善の説明は、「嚮に我が文部省は若干篇を摘訳して版に鑲り、翻刻を許し、以て広くそれを伝うるも、未だ補遺をなして以て全書を求むる者あらず。丸善社主人これを憾み、遺漏を補訳し並びに旧本を訂正して以てこれを完うするを請う」<sup>(33)</sup> というものであった。また、丸善版に序を寄せた中村正直も、学術の進歩に伴って百科の書物が内容を更新していくことは当然であると述べ、「百科の窺要を博く綜べ」たるこの書を「人智之宝庫」と推奨していた<sup>(34)</sup>。これら民間翻刻版を含め、「百科全書」が総計でどれほど発行されたのかは不明である。ここでは、丸善版の序言が、出版にあたって予約を募ったところ、それに応じた者が千あまりだったと述べているのを手がかりに、総計では「優に二、三千部以上の部数が全国にゆきわた」<sup>(35)</sup> っただろうとする見解があるのを指摘するにとどめることにする。

以上を総合するに、日本最初の「百科全書」は、官による速成とそれを払い下げられた民の側の継承・補訂によって、明治前半の知的風景の改変に貢献したと言えるであろう。つとに大蔵省の官を辞し、民間出版者の立場にあったかの田口卯吉は、多額の賃訳とお役所仕事によって出来上がった「百科全書」には、いささかの不満はあったようだが、それでも日本人の手になる最初の百科事典『社会事彙』（1890-1891年）を編纂刊行するにあたり、同書の跋文で「日本の紀伝及事実就いて尋ねんと欲せば、宜しく人名辞書及社会事彙につきて見るべし」としながらも、「而して泰西の歴史及び学術に就いて尋ねんと欲せば文部省の百科全書に就いて見るべし」と述べ、文部省版の「百科全書」をかれの考える日本の百科全書四種の一つに数えていた。

むろん、田口の『社会事彙』をはじめ、文部省版の「百科全書」も、次々に生まれ出る新版の辞典、事典類によって、次第に駆逐され、やがては忘れられていくことになる。だが、「百科全書」諸版の刊行された明治6-18年が、いわば新訳語が発生から定着へ向かっていく重要な時期にあたることを思えば、この書物は「人智之宝庫」のみならず、新訳語・概念語の宝庫であり、同時にまたそれら新訳語のある種の標準になっていったのではないかと考えられよう。先に述べたように、個々の新訳語が定着するかどうかは、それら訳語の出来の善し悪しもさることながら、実際には訳語を載せた媒体の発行量や流通量によって規定されるという傾向が見られるからである。

## Ⅱ 清末中国における翻訳百科事典 ——会文学社版『普通百科全書』

### (1) 中国における「百科事典」概念

中国では今日でも、Encyclopaedia に「百科全書」という語をあてる。日本では、平凡社の『大百科事典』刊行（1931年～）にさいして作られた「事典」なる新語が、書物自体の売れ行きに伴い、「百科全書」に取って代わって Encyclopaedia の訳語になっていったのに対して、中国では清末に日本語から移入された「百科全書」が、そのまま使われ続けたのである。「百科」にしても、「全書」にしても、中国には元々ある字句だが、それが連結されて書物の類型を示すものとなったのは、日本からの影響だというのが今日の定説である<sup>(36)</sup>。

その際、最も早い「百科全書」の用例は、康有為の「日本書目志」（1898年）とされる。康有為が東京の書店取扱書目をもとに編んだこの書籍目録<sup>(37)</sup>の中に、かなりの数の「百科全書」が見られ、それが中国人の文章に見える最初の「百科全書」の用例だと言うわけだが、実は「日本書目志」に登場する「百科全書」とは、そのほとんどが前章で紹介した文部省版「百科全書」の各分冊であった。いうなれば、中国語における「百科全書」もまた Encyclopaedia の訳語ではなく、特定の書物のタイトルとして流入したものなのである。それは康有為が「百科全書」について付した以下の簡単な説明からもあきらかであろう。

書を購うに、叢書より善なるはなし。一書を得て百学備わり、一書を得て専門の業備わる。「普通学」「百科全書」「我自刊我叢書」の三者は、金玉淵海なり<sup>(38)</sup>。

文部省版「百科全書」は一種の叢書とされているわけである。ただし、先に述べたように、「百科全書」は何らかの配列にもとづいて小項目を解説したいいわゆる「辞典」ではなく、諸学の概説の集成であったから、「叢書」という理解は決して間違いではなかった。

しかしながら、そうした固有名詞としての「百科全書」の語が伝播してくる以前に、中国で Encyclopaedia の語なり、その内容なりが全く紹介されていなかったわけではない。19世紀中国における西洋の知識や情報は、在華宣教師が紹介の先鞭をつけることが多かったが、実は西欧の百科事典の記述を用いてある学問の大枠を伝えようという試みも、宣教師によって行われていた。江南製造局翻訳館がフライヤー（John Fryer）訳で刊行した『代数術』（1872年）と『微積溯源』（1874年）は、それぞれ『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（*Encyclopaedia Britannica*）第8版の Algebra と Fluxions の、また『公法総論』



(1894年以前)は同書第9版の *International Law* (Edmund Robertson 執筆) の翻訳であると言われている<sup>(39)</sup>。実はフライヤーによれば、そもそも翻訳館設立にあたり、その一員となる徐寿は翻訳の便のためイギリスに「泰西大類編書」を注文、それを翻訳して広めようとし、またフライヤー自身も、「イギリスで八版を重ねていた」「大類編書」の各項目に従って編訳を進めようという構想を持っていたらしいが、結局江南製造局では「緊用之書」の翻訳が急がれたため、「大類編書」の編訳はなされず、個別の実用書の翻訳に落ち着いていったのだという<sup>(40)</sup>。ここで言う「泰西」の「大類編書」こそは、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』にはかならない。

この「大類編書」のほか、梁啓超が1897年はじめに執筆した「変法通議／論幼学」で「名物書」として紹介したものも、百科事典のことだと考えられる。初学者向けの書物ジャンルを様々にあげる中で、梁啓超は「名物書」について、

西洋には、旧来の訳だと字典と称する書物がある。最も完備したものだと数十冊にもなり、〔アルファベット〕26文字順に編纂してあり、古今万国の名物がみな載っている。それゆえに〔外国語の〕語法に通じている者は、これを頼りにすればどんな書物を読むものにも不自由しないのである。中国には、これまでこの種の書物はなかった<sup>(41)</sup>。

と述べている。ここで述べられている「名物書」は、辞典 (dictionary) のようにもとれるが、大型のものは数十冊にもなるというのだから、やはり『エンサイクロペディア・ブリタニカ』のごときものを念頭に置いているのだろう。そのさい、梁啓超は中国にはなかったと言っているわけだから、ここで言う西洋の「名物書」とは、いわゆる在来の「類書」とは別物だと考えていることがわかる。「百科全書」なる語が清末に定着する以前には、上記の「大類編書」や「名物書」のほかにも、いくつかの訳語が考えられている<sup>(42)</sup>。そのすべてについて紹介するだけの紙幅もないので、ここでは「類典」についてだけ説明しておこう。

「類典」の語は、典籍、著述の集成物の意で古くから使われていた漢語だが、日本でも中国でも、西洋型の百科事典を指す場合に、しばしば用いられた。日本で言えば、前述の文部省版「百科全書」とほぼ同時期に出された法律、政治学関連の翻訳版事典が、原著 *Political Cyclopedia* を「政事類典」と解した上で、訳書名を『泰西政事類典』<sup>(43)</sup> としている。また、自身「歩くエンサイクロペディア」と呼ばれるかの南方熊楠も、日本で「百科全書」が定着していた1890年代に、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』に言及するさいには、「大英類典」と記していた<sup>(44)</sup>。『泰西政事類典』にせよ、『エンサイクロペディア・ブリタ

ニカ』にせよ、いずれもアルファベット順に事項を配列するものであったから、かかる工具書機能をもつものは、叢書の性質を帯びた「百科全書」とは別の種類の書物と考えられたのかも知れない。ちなみに、「類典」は日本ではその後、様々な時期の法律・法規を集成した書物に多く用いられることになる。

一方、中国の場合も、後述の『普通百科全書』が刊行され、「百科全書」の語が普及する一方で、あえて「類典」を用いる場合があった。李石曾（李煜瀛）らである。李石曾は後年、世界規模の百科全書編纂に意を注ぐことになるのだが、そのかれが清末にパリで刊行した画伝『近世界六十名人』（世界社、1908年）はディドロ（狄岱麓）を紹介するさい、その百科全書を「百科類典」と表記していた<sup>(45)</sup>。他方で、それと同じ頃、のちに民国の書誌学者として知られることになる楊家駱の父（楊紫極）が、1908年から亡くなる1922年まで、ディドロらフランスの『百科全書』の翻訳（選訳）を行ったということが伝えられている。生前二百余万字に達したというその手稿（未刊に終わる）は「提氏類典」と名付けられていた<sup>(46)</sup>。

もっとも、かれらが案出した「類典」の語は、中国でもほとんど普及せず、「百科全書」という訳語が一般的となる。その理由について、李石曾は後に、中国にはかの「四庫全書」があったので、その名称が影響したのだと語っている<sup>(47)</sup>が、より直接的な理由は日本語経由のものであろう。すなわち、多くの中国人留学生がやって来るようになる20世紀初頭の日本にあふれかえていた各種の「百科全書」、そしてそうした百科全書をもとにして編訳された中国語版の『百科全書』がこの名称の定着に決定的な要因となったのだった。以下、清末に初めて「百科全書」を冠して出版された『普通百科全書』を検討しよう。

## （2）『普通百科全書』

中国で最初に「百科全書」を冠して出版されたのは、会文学社（上海）が1903年に刊行した『普通百科全書』（一名『編訳普通教育百科全書』全100巻、100冊）である。研究史の上でこの書物に最初に着目されたのは、さねとうけいしゅう氏であろうと思われる<sup>(48)</sup>。その後、さねとう氏の紹介を手がかりに、熊月之氏、鄒振環氏らがこの「百科全書」の概要を紹介している<sup>(49)</sup>が、この翻訳百科事典の書誌（とりわけ、編纂にさいして参照された日本語原著）については、なお正確を欠くうらみがある。そこで以下、主に日本語版原著を確定させつつ、この翻訳百科事典の出版経緯と影響を概観する。

会文学社版『普通百科全書』（図2）は、明治期の日本で刊行された数種類の百科全書型叢書をもとに翻訳、編纂された線装本スタイル（木刻の巻もあれば、石印の巻もある）の書物である（光緒29〔1903〕年刊）。

翻訳にあたったのは、范迪吉（字は枕石、江蘇昭文〔現常熟〕の人、生卒年未詳）なる留日学生の率いる東華訳社（東華訳書社と表記されることもある。総訳述：范迪吉、編輯：黄朝鑑、李思慎、張振聲、顧福嘉、校閲：顧厚燾、鄭紹謙）であった<sup>(50)</sup>。1903年に全100巻（100冊）が刊行されており、当時としては飛び抜けて大きな出版事業だったということができよう。

出版元の会文学社は、1903年に沈玉林、湯寿潜らによって上海で設立された民間書肆で、同年に范震亜編訳『化学探原』を、また1905年に蔡元培監修の『最初初等小学教科書』数種などいくつかの教科書を出したということ以外、詳しいことはよくわからない<sup>(51)</sup>が、それが正しいとすれば、出版社創立の最大の眼目がこの「百科全書」刊行ということになる。編輯のひとり李思

慎が寄せた序によれば、范迪吉は「一人一手を以て、<sup>いくとしつき</sup>数寒暑を更ね、<sup>かさ</sup>廢寝忘食の勞もて百科の巨冊を訳録」<sup>(52)</sup>したというから、翻訳、編纂には数年を要したということになる。また、各分冊には「東華訳社編訳」とあるだけで、個人の訳者名は記されていないことから、恐らくは複数人が翻訳に当たり、総訳述の范迪吉がほぼ一人でそれらの訳稿をとりまとめたのではないかと見られる。

会文学社版『普通百科全書』（以下、単に『普通百科全書』と記す）は、全100巻からなるが、100項目の分野について説明したものではなく、難易度ごとに三段階（初級学類〔17巻〕、普通学類〔21巻〕、専門学類〔62巻〕）にわけた学科別概説書であった。具体的に言えば、初級学類は歴史・地理から数学に至る17分野の入門書（問答書）であり、普通学類は同様の21分野の概説書、専門学類はより細分化された62分野の専門解説書からなっていた。それらに対応する日本語版原著（基本的には『普通百科全書』の各巻の名称は、日本語原著と同じである）で言えば、初級学類はすべてが富山房が1894-98年に刊行した「普通学問答全書」という文庫本サイズのシリーズを一冊ごとに翻訳したものであった。同様に普通学類は、その多くが富山房の「普通学全書」シリーズ（1891-1894年）を



図2

翻訳したもの（そのほか、第一章で触れた文部省版「百科全書」からも二冊が翻訳されており、当時なお一定の影響を持っていたことがうかがえる）、そして専門学類は、すべてが博文館の「帝国百科全書」シリーズ（1898-1910年）の翻訳であった（本稿末尾の附表参照）。

『普通百科全書』がこのような段階別構成になっているのは、「務めて中国人民教育界の程度に合するを以て注意となす」から、すなわち一律に学問諸科の高度な解説をするのは中国教育界の現状では難しいため、平易な入門書と組み合わせることによって、「級に分かちて以て進む」方針をとったのだという<sup>(53)</sup>。また、その構成は、いわゆる文系と理系を網羅し、基礎から高等にいたる段階別教科書の集成とも言えるものであったから、この『普通百科全書』を1セット揃えれば、それで各級学堂の参考書がおおよそ完備するという面も合わせ持っていた。したがって、教科書出版を手がけていた会文学社の経営から見た場合、『普通百科全書』は諸段階の教科書集成の意味も持っていたのかも知れない。

ここで原著となった富山房の「普通学問答全書」「普通学全書」、博文館の「帝国百科全書」について簡単に説明しておこう。富山房、博文館はともに明治から昭和初期の日本を代表する大手出版社であり、とりわけ教科書、学習参考書、大型叢書の刊行で知られている。先にも触れたように、19世紀末から20世紀初めの日本の出版界では、様々な叢書が〇〇全書の名で刊行されていたが、そうした潮流をリードしたのが、この二つの出版社であった。富山房の「普通学問答全書」（全21冊刊行）は、「課外講習の料」「諸試験必携」を売り文句に刊行された一種の受験参考書シリーズであり、「普通学全書」（全31冊刊行）の方はそれよりも上級の参考書として刊行されたものである。後者について、富山房の社史は、「中等程度的一种簡易な百科全書ともいふべき」もので、「富山房創業時代の成功した出版物」にして「明治二十四五年代から追々盛になった百科全書の気運に魁けたもの」<sup>(54)</sup>と評している。ただし、その大半が「富山房編」になっているように、富山房の編集者が著名学者の助けを借りて洋書概説書を再編集したものが大半だった。

これに対して博文館の「帝国百科全書」は、1898年から十余年を費やして刊行された全200冊の大型叢書で、富山房のそれとは異なり、それぞれの分野の専門家が書き下ろした概説書の一大集成であり、まさに全書と呼ぶにふさわしいものだった。博文館の社史は「数多き本館出版物の中に、当時世に最も権威あるもの」<sup>(55)</sup>と誇り、また刊行当時の広告でも、「大英百科全書が、世界に於て万種の事物を最も完全に網羅せる図書とせば、帝国百科全書は少くも日本帝国の、『エンサイクロペヂヤ』なり」と豪語している<sup>(56)</sup>。このほかにも博文館は、同じ時期に「日用百科全書」「通俗百科全書」のシリーズを出しており、「百科全書」の語は日本の出版界にあふれかえていたのであった。清末の留日学生が目

にしたのは、そのような日本出版界であり、「それ百科の書は東邦の巨籍にして、亜欧の菁英はここに薈萃せり」「日本の科学を重んずるや、日用百科あり、通俗百科あり、小百科あり、また駁々として欧美と並隆せるなり」<sup>(57)</sup> との思いから、それら日本の百科全書の翻訳に取り組んだのである。

かくて『普通百科全書』は、「東西の大学者の最新最重要の大著作」<sup>(58)</sup> の翻訳を謳って刊行されたわけだが、結論から言えば、博文館「帝国百科全書」のような権威や反響を得ることはできなかった。その最大の原因は、全訳されたのが初級学類（17巻中16巻）と普通学類（21巻中13巻）の分冊だけで、巻数でいえば6割以上を占める専門学類は、大半が部分訳で終わってしまったことである（附表参照）。例えば、『経済汎論』の場合（図3）、原著273頁のうち、翻訳されたのはわずか43頁分に過ぎず、『応用機械学』や『日用化学』に至っては冒頭の部分1～2割が翻訳されたのみだった。つまり、原著の「総説」や第一章にあたる部分が翻訳されただけで、各論に当たる部分は全く省かれていたのである。他の「専門学類」もおおむね同様で、「専門学類」とはいいいながら、「専門」にあたる部分はほとんど欠落しているのだから、内容としては初級学類と大差のない代物だった。

民間の一書肆が、少数の留日学生を頼りに、限られた時間の中で、「百科全書」ものの翻訳編書をやろうとしたこと自体に、無理があったのは言うまでもあるまい。単純に日本と比較するだけでも、明治初期の「百科全書」は文部省が主導して人材、資金を準備し、洋学者50人以上を動員、10年にしてようやく原書2巻1600頁ほどの英書を翻訳したのである。これに比すれば、『普通百科全書』のもとになった日本のそれは100冊、総計1万5千頁を超える。さらには、当時の留日学生にしても、「吾が中国に流通せる各書において、参考に供すべきもの鮮し」（「東

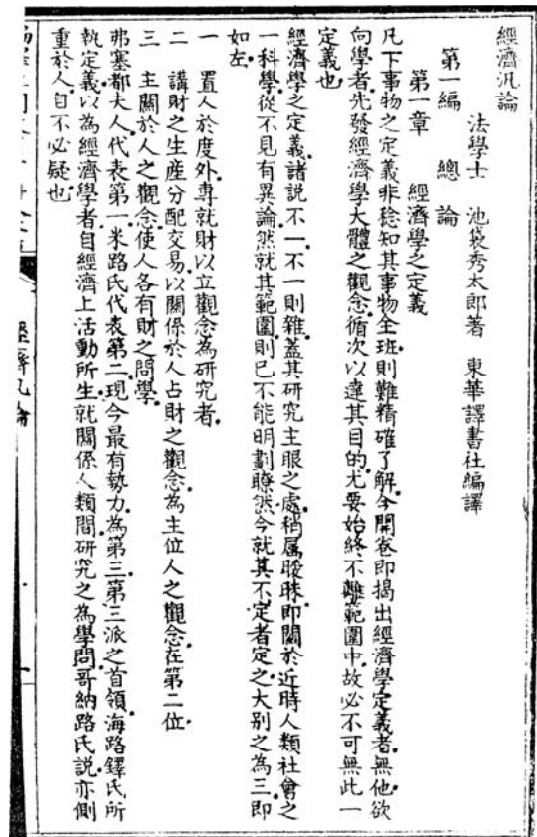


図3

華訳社編訳本書之原因)」という状況は、明治はじめの日本人と同様であった。それゆえ、「悉く原文に照らして直訳し、敢えて妄りに損益を加えず」（「本書之凡例」という直訳方針で臨んだとしても、到底全訳はできなかったのである。

また、今ひとつ日本との対比をするならば、文部省版「百科全書」が民間書肆に翻刻を許し、それを受け改訳を含めて出版が継続、拡大されていったのに対し、『普通百科全書』は各巻の冒頭に無断翻刻を厳禁する上海道台の告示を掲出していた。中国内地における海賊版の横行は、民間書肆にとっては死活問題であったから、会文学社のこの措置はいわば当然のことではあっただろう。ただし、こうした措置によって、翻刻・改版を通じて「百科全書」が改訂され、それによって正規非正規の販路が広がるという道が狭められたこともまた否めまい。

こうしたことが影響しているのか、『普通百科全書』が世上の評判になったことをうかがわせる資料は、ほとんど残っていない。編訳の中心となった范迪吉すら、清末に何冊かの日本書の翻訳をしたこと以外、具体的な事略も生卒年も不明である。書物自体の伝存状況も悪く、筆者の知る限り、日本国内では早稲田大学中央図書館に完全なひと揃いが伝存するのみである<sup>(59)</sup>。『普通百科全書』が刊行された1903年といえば、留日学生による翻訳専門雑誌『訳書彙編』『遊学訳編』がすでに刊行され、『江蘇』『浙江潮』などの刊行が相次いでいたが、それら当時の刊行物にも『普通百科全書』の関連記事はほとんど見えない。唯一『遊学訳編』1号（1902年11月）の巻末にそれらしい広告（「普通学全書已訳広告」）があるのみなのである<sup>(60)</sup>。それゆえ、代表的な中国百科事典史研究者の鍾少華氏が、『普通百科全書』を——それが形式面で叢書の域を出ないこともあり——「過渡期」の産物と評するのもやむを得ないところであろう<sup>(61)</sup>。

ただし、かかる不備はあるとはいいいながら、同時代の他の百科全書型書籍、例えば『西学啓蒙十六種』（艾約瑟〔Joseph Edkins〕編、16巻、16冊、1896年再版）<sup>(62)</sup>や『新学大叢書』（明夷等輯、120巻、32冊、1903年）<sup>(63)</sup>に比べれば、その網羅的性格は群を抜いている。さらに、日本の学問分類や訳語も直載に踏襲しただけに、のちに中国で定着する学問分野名称との継承関係が明瞭にうかがえるのも特徴である。また、直接にこの書が広く流布した形跡こそないものの、分冊の一部は後に商務印書館の教科書に転用（盗用？）された形跡がある。「商務印書館出版教科書目」（光緒32〔1906〕年）<sup>(64)</sup>に見える〇〇学問答と題する数冊や『東西洋倫理学史』（木村鷹太郎原著）などは、『普通百科全書』をもとにしているのではないかと見られる。いずれにせよ、この「百科全書」についてはさらなる分析が望まれるのであり、中国における訳語や翻訳概念の形成、定着、とりわけ日本語経由の語彙の受容にかんして、貴重な事例を提供してくれるはずである<sup>(65)</sup>。

### Ⅲ 近代日中における『エンサイクロペディア・ブリタニカ』——

前二章で紹介した日中の翻訳「百科全書」は、その形式からすれば、いずれも我々が今日考える百科事典（アルファベット順なり五十音順なりの項目配列による検索利便性を備える小項目主義事典）とは異なり、網羅的学術叢書の性格を強く有するものだった。そうした形式の不備をもってその不完全性を指摘するのは容易だが、それら初期の「百科全書」が編まれた時期の知的状況全般を考慮するならば、西洋型の知識体系の受容が始まったばかりの時期にあっては、むしろ学科別の概要を示す大分類、あるいは大項目の「百科全書」こそが求められていたということに目を向けるべきであろう。この時期にあっては、いわゆる「引く事典」ではなく、「読む事典」が必要なのである。

中国について言えば、これは何も清末に限ったことではなく、現代中国のもっとも総合的な百科事典である『中国大百科全書』も、その第一版（1993年完結、全73巻+索引1巻）では、軍事、農業など60余りの知識分野別に巻分けがなされ、各巻の中がピンイン・アルファベット順の項目配列になっていた。全巻がアルファベット順になったのは、2009年の第二版になってからである。すなわち、諸学科の体系性が確立、定着していない時点において、小項目主義の事典は、かりに全部がアルファベット順なりに配列してあっても、読者にとっては、はなはだ使いにくいのである。『エンサイクロペディア・ブリタニカ』にしても、初期の諸版は、大項目と小項目が混在する形式をとっており、例えば第1版（全3巻）には、数十ページ以上にわたる大項目（例えば、Agriculture といった項目）が40以上もあり、それが英英辞書の如き簡単な語釈の小項目と混在していた。

その『エンサイクロペディア・ブリタニカ』（以下、『ブリタニカ』と略記）は、日本においても、中国においても、百科事典を編む者すべてにとっての極北であり、また諸学の集大成を体現するものであった。それゆえ、その全訳は早くから構想されはしたものの、西洋型の知識体系自体の受容が急務とされる状況にあっては、大小項目の入り交じる同事典の全訳など望むべくもなかった。ただし、『ブリタニカ』は、知の宝庫であると同時に、知識を詰め込んだ高額商品でもあり、日本・中国で共に精力的な原書の販売活動が行われた。まず日本のケースを紹介しておこう。

明治日本で『ブリタニカ』原書の販売にあたったのは、文部省版『百科全書』の翻刻、補訂を行った丸善であり、1903年以降、『ブリタニカ』第9版、第10版の大々的な販売を行った。『ブリタニカ』はそれまでも個別に輸入されてはいたが、この時期に販売活動が一挙に積極化したのには、『ブリタニカ』側の著作権移動が関係していた。すなわち、1898年に『ブリタニカ』第9版の販売権、再版権を手に入れた米実業家フーパー（Horace Everett

Hooper) は、ロンドンのタイムズ社とタイアップしてその販売促進を行い、その後1903年には、改訂（とは言っても、既存の第9版24冊に補遺11冊を加えたもの）の上でタイムズ社から出版した『ブリタニカ』第10版も、期限付き半額値引き、月賦可（初回払い込み時点で全冊を配達）など同様の積極的セールスで、世界中に売り出したのである。タイムズ社が日本での提携相手（特約代理店）としたのが丸善であった。

日本での『ブリタニカ』販売事情については、「ある意味で丸善を飛躍的に発展する基礎をつくったものは、タイムズとの提携による大英百科全書の月賦予約販売にあった」と断言する『丸善百年史』に詳しい<sup>(66)</sup>。同書によれば、1903年販売の『ブリタニカ』第9版（本巻24冊＋索引1冊、最も廉価だったクロス版で175円〔一括〕、195円〔月賦〕）の場合、1,125部の予約があり、京都出張所（のちの支店）まで設けて販促にあたった1906年販売の同書第10版（全35冊）では4,200部の予約があった。これに1903年に予約販売した第9版補遺版（全11冊）の600部を加えれば、わずか3年の間に『ブリタニカ』が5,600部も売れたということになる<sup>(67)</sup>。ちなみに、前章で紹介した博文館の「帝国百科全書」シリーズ（全200冊）の場合、各分冊（300頁ほど）は40銭前後で、200冊全部を一括で購入しても65円に過ぎなかった（割引があったため）<sup>(68)</sup>。その3倍ほどの値段の英語の大事典が、小説本初刷り500部が普通であった<sup>(69)</sup> 当時において、5,600セットも予約販売され、購読者のほとんどが約を違えず全額納付したというのだから、驚異的な売れ行きというほかあるまい。

日本での売り上げ好調に気をよくしたタイムズ社の次なるターゲットが中国であった。開化の度合いは日本に譲るとはいえ、日本に数倍する人口を有する中国でも相当の売り上げが見込めると判断したものと見える。中国での提携先（特約代理店）は商務印書館、日本での丸善に匹敵する出版社兼洋書取扱書店である。タイムズ社の天津支社、上海支社も、1906年11月から天津『大公報』、上海『申報』など有力紙に相次いで広告を打って積極的な販売を開始した。中国で販売されたのは、日本で4,200部の引き合いがあった第10版であった。

1906年11月26日の天津『大公報』に掲げられた折込広告は、「<sup>タイムズ</sup>倫敦泰晤士緊要告白」という大きな見出しを掲げ、初めて本格的に中国で売り出される『ブリタニカ』の意義を説明していた。口上に曰く、「大英百科全書」は英国の「図書集成」<sup>(70)</sup>にして、全35冊、総重量100キロ、3万ページ、4千万語に達すること、「各国の著名な博物家、教育家、政治家、および探検家など二千人を下らぬ」専門家によって執筆され、「10万ポンド、中国銀にして約60余万両」の巨費を投じて完成したものであること、今回中国に輸入したのは450部（天津300、上海150）で、期限付きで定価の半額で予約販売し、月賦の場合初回





が定着してしまい<sup>(79)</sup>、4月に北京、天津、上海での売れ行き（総売上300部以上）を告げ、将来的には千数百部に達するだろうと豪語はした<sup>(80)</sup>ものの、そのあとは具体的な数字が挙がらなくなり、夏になると広告自体がぱったりと姿を消してしまったのだった。また、半額割引の対象についても、当初は今回入荷分限りということで、しきりに残部僅少を叫んでいたが、夏の終わりから『申報』に広告が再開されると、割引期間は残りわずかと謳うようになり、やがて具体的期日をもって申込みを締め切るという通告になっていった。こうした一連のやり口は、限定予約の高額商品を売り込むさいの広告としては、常套手段なのかも知れないが、やはりそこから透かし見えてくるのは、売れ行きの伸び悩みという厳しい現実である。

申込み期限である1907年11月15日が迫ると、『申報』では再び連日大きな広告が打たれ、いくらか駆け込み需要もあったようである。現に期限後の広告では、直前に申込みを受け付けながら在庫不足などの理由で納入できなかった分については、追加手配をし、半額料金を適用するむね、声明している<sup>(81)</sup>。広告はこうした追加手配分がどれほどに達するのか、何も述べておらず、駆け込み需要の実態については不明だが、前述の天津では最後まで在庫が残ったことを考え合わせれば、中国全体では最終的に、最初に輸入された450セットほどが売れたにとどまったと推定してよいだろう。日本の十倍の人口を持っていればこそ、タイムズ社は中国市場に期待したわけだが、ふたを開ければ売り上げは日本の十分の一だったわけである。

附言すれば、中国における総代理店であった商務印書館は、決して『ブリタニカ』の販売に不熱心だったわけではなく、『ブリタニカ』の効用を述べる諸家の文章を集めた『大英百科全書評論』なる小冊子（1907年）まで作成している<sup>(82)</sup>。また、商務印書館自身が刊行する総合誌『東方雑誌』には『ブリタニカ』の広告はないものの、外国語（英語）のできる読者向けの雑誌には、顧客を絞った広告を打ち、関連記事を寄せている。帰国留学生らが組織した寰球中国学生会の雑誌『寰球中国学生報』（英中両語の記事からなる）は、その一例である。『ブリタニカ』販売量の日中における違いの原因をさぐる上でも、同誌の記事は興味深いので、紹介しておこう。

1907年6月刊行の『寰球中国学生報』第5/6号には、『ブリタニカ』の意義を紹介する二つの文章が載っている。『ブリタニカ』の全訳を呼びかける董寿慈なる人物の「擬訳英文百科全書引言」と、まさに英学の第一人者たる嚴復の「英文百科全書評論」である。Encyclopaediaの原義を「万彙総録」とする董寿慈の文章もそれなりに面白いが、ここでは全集未収の嚴復「英文百科全書評論」<sup>(83)</sup>をとりあげる。

嚴復は冒頭で、「百科全書は、西文では<sup>エンスイクロペディア</sup>嬰塞骨羅辟氏亜と言ひ、正訳は智環、あるいは

学郭である。つまり、一部の書をもって万有を苞羅するもの」<sup>(84)</sup> という解釈を示した上で、西洋の「智環」は、どの国でもたびたび改訂を重ね、時々の学術の進歩を如実に反映していることを紹介する。そして、くだんの『ブリタニカ』については、「倫敦の太晤士はタイムズ環球の報章の泰斗である。報しんぶんを出すにさいしては、常に何百人もの名士を集め、天下のあらゆる事象を論じて余すところがない。その取材対象は並ぶもののないほど豊富だが、このたびそれを集めて本に編集し、学者に供することとなった。学者がこれを一家に一部置いて参照に備えれば、居ながらにして天下のすべてを知ることができる。大は国家や政法から小はモノの名称まで、この書をひもとけば一目瞭然、すべてを知ることができるのである」と声を大にして宣伝するのであった。

この文章は恐らく、販売促進のため頼まれて書いたものだから、「一家に一部」や「居ながらにして天下のすべて」といった、およそ厳復らしくない言葉遣いになっているのであろう。また、文章の結びが「惜しいかな、吾が国の図書集成はいたずらに充棟の書であって、使い勝手の点ではまったく及ばない」と述べて、中国の古今図書集成への批判で終わっているのも、とってつけたような感じがぬぐえない<sup>(85)</sup>。しかしながら、文中のいわゆるフランス百科全書派の功績への言及は、「智環」に寄せる厳復の期待の大きさを物語ると言ってよいだろう。すなわち、「狄ディドロ魯ダランベール」「達林白」らが苦難を経て「智環」にとりくみ、大いに啓蒙に努めた結果、「書成るにいたりて、革命の期また至れるなり。ああ、学術の時世を左右するの功、此の如きものあるかな」と称えるのである。

このような期待と懸命の宣伝にもかかわらず、前述のように『ブリタニカ』の中国での売り上げは、同時代日本の十分の一に過ぎなかった。これはどう解釈すべきなのか。往々なされる解釈は、西洋の知識に敏感に反応して摂取する日本人に対して、それに鈍感・無関心な中国人という対比である<sup>(86)</sup>。たしかに、日本での売り上げが異常なほど多いことは事実で、日本人が西洋の知識に敏感だったということは言えるだろうが、だからといって逆に中国人がそれに鈍感・無関心だったとまで言うのは、ある種のバイアスを帯びた解釈であろう。西洋の知識は西洋の原著から直接に学んでこそ本物だ、その本物を求める労苦を嫌ったのではどう頑張っても底の浅い西洋理解しかできない、という異文化摂取の態度にかかわるバイアスである。そうした態度は、実は前掲の厳復の文章を載せた『寰球中国学生報』の広告にも見られる。

『寰球中国学生報』第5/6号には、丸々3ページを使った『ブリタニカ』の広告が載っているが、その見出しは「日本は善く泰西に学ぶ者なり」「中国先ず日本に学ぶは可なりや」である<sup>(87)</sup>。言うところは、日本が強国になったのは虚心に西洋に学んだからであって、中国も日本に学ぶよりは直接に西洋に学ぶべきだ、であろう。そのためには、直接に英語

で西洋に学べる『ブリタニカ』を買うべきだ、というロジックである。同様の見解は、『ブリタニカ』販売キャンペーン直後の『申報』の論説にも、「いやしくもその専門領域に精通しようと思うのなら、西洋語を学ばなければならないのであり、この書物を買わねばならないのである」<sup>(88)</sup> という形で表白されていた。

だが、西洋の知識は直接西洋の書物を読んで学べというこの正論は、文化原理主義としてはその通りであっても、知識の流通の実態とは乖離した主張というべきである。『ブリタニカ』が中国で日本ほど売れなかった大きな理由は、中国知識人が西洋の知識に鈍感・無関心だったからではなく<sup>(89)</sup>、西洋語の著作を読まなくても西洋の知識を手に入れる道がすでに確立していたからではなかったか。

### 東アジアの近代概念語に見えるデファクト・スタンダード ——結びにかえて——

『ブリタニカ』が販売された1906-07年の中国において、西洋事情や西洋型の知識は、すでに英語の『ブリタニカ』に頼らずとも手に入れることができた。外国語としては西洋語以外に日本語があり、また日本語経由で移入された新概念語を満載した訳書がすでに大きな市場を形成していたからである。この点、日中ともに、専門書であろうと通俗書であろうと、直接西洋語の書物に知識を求めざるを得なかった19世紀中葉の状況とはまったく異なる。

日本においては、主に幕末に『海国図志』や『瀛環志略』といった西洋事情に関する漢籍を移入し、それに訓点を施すなりの工夫をすることによって、いわば中国語を通じて西洋に関する情報を取り入れた時期があったが、20世紀初頭ともなれば、中国語を媒介にして西洋の知識を受容することは、ほとんど見られなくなった。すでに紹介した文部省版『百科全書』のような原語からの翻訳作業の蓄積とその際に生まれた新語彙（和製新漢語）の定着によって、西洋文化に対応した言語体系が出現していたからである。周知のごとく、中国での本格的な西洋型知識の導入は——前述の『普通百科全書』がすべて日本書からの翻訳で出来上がっていたことに顕著に見られるように——20世紀初頭のそうした日本語メディアに多くを負っていたのであって、『ブリタニカ』が販売されたころには、日本語経由の「新名詞の輸入」が「民徳の墮落」と関連づけて論じられるほど、幅を効かせていたのだ<sup>(90)</sup>。西洋語自体を学ぶという目的があるのならまだしも、西洋の知識を理解しやすい方法で摂取するだけであれば、西洋語の原典から直に学ぶという困難な道をあえてとる必要は、20世紀初頭にはもはやなかったのである。それは、そうであるべきだっ

たか否かという是非の問題——よりかみ砕いて言えば、日本語からの重訳によって手軽に得られるのは真の西洋の知識ではないとか、真の西洋理解のためには原典著作との言語的・思想的格闘が必要だとかいった是非の問題——ではなく、そうだった（近代中国における西洋知識・翻訳概念の理解は、和製新漢語に相当依存していた）という事実の問題である。

この問題を考えるにあたっては、日中間の新語彙定着を言語におけるデファクト・スタンダードの視角から説明することが可能なように思われる。ある規格が初発の段階で市場の主流を形成してしまうと、公的規格の制定を待たずに、それが事実上の統一基準になってしまうことを、デファクト・スタンダード（*de facto standard*、事実上の標準）と呼ぶが、和製漢語の翻訳概念も、いわば近代東アジアにおける言語のデファクト・スタンダードではなかったか。電子機器や情報規格の分野において顕著なように、デファクト・スタンダードになれるかどうかは、規格（性能）自体の技術的卓越性よりも、むしろ製品・仕様を市場に投入するタイミングや市場制覇力、あるいはその規格に合う関連商品（ソフトウェアなど）の多寡に左右される面があることはよく知られている。かりに卓越した技術にもとづく規格であっても、いったん市場におけるデファクト・スタンダードが形成されてしまった後では、そこに参入することは難しい。

それを東アジアの言語世界に当てはめてみるならば、和製漢語というデファクト・スタンダードが定着してしまった20世紀初頭の段階では、仮に嚴復や李石曾が *Encyclopaedia* に対して「智環」「学郛」「類典」といった訳語を創出しても、「百科全書」という和製漢語を言語の市場から駆逐することは到底できなかったと説明できるだろう。繰り返して言うが、それは嚴復や李石曾の訳語が優れていたかどうか、あるいはそれを使うべきだったかどうかとは、別次元の問題なのである。和製漢語の東アジアにおけるデファクト・スタンダード化において、言語市場における制覇力に相当するものは、文部省版『百科全書』の発行に見られた官民協力の出版体制（およびその際に案出された西洋語に対応する新漢語群）であり、関連商品の充実にあたるものが、その出版体制のもとで出されたあまたの書物であっただろう。そうした言語のデファクト・スタンダード化をあと押しするものが、19世紀後半の日本にはあり、中国にはなかった、あるいは中国がそれに乗り出した時には、東アジアにおける新漢語のデファクト・スタンダードは、すでに出来上がっていたということなのである。

日本と中国で、「百科全書」を掲げる書物がはじめて翻訳、出版されたのは、それぞれ1870年代と1903年だが、まさにその間の30年が、言語市場のデファクト・スタンダードにおける決定的な時期であった。それはいみじくも、王国維が1905年に、諸々の訳語については「日本の学者が我国より先にすでにこれを定めてしまっている」（『論新学語之輪

入』と述べたとおりである。

『ブリタニカ』の翻訳は、日本でも中国でも待ち望まれたものではあったが、それが実現したのは、日本では1970年代に入ってからのこと<sup>(91)</sup>、中国では1980-90年代のこと<sup>(92)</sup>である。このとき、日本語版の『ブリタニカ』は、1930年代以降「百科全書」に代わって定着した「百科事典」を書名に掲げていたが、中国のそれは20世紀初頭のデファクト・スタンダードそのままに「百科全書」の書名を保っていた。言語のデファクト・スタンダードは、固定的なものではなく、時代につれて変化していくとはいえ、19世紀末から20世紀初めにかけて、いったん東アジアをおおった和製漢語による第一波の概念語デファクト・スタンダードが、いかに深遠な影響を持ったかを物語るものであろう。

## 註

- (1) 現在では Encyclopaedia の訳語に百科「事典」を用いることが多いが、この語は平凡社の『大百科事典』（1931年～）以降に普及し、定着したものである。一方、中国では「事典」の語はあまり使われず、今日でも「百科全書」が一般的である。実はこうした違いの由来も本稿の検討対象なのだが、用語の混乱を避けるため、日本のものも、中国のものも、書名、固有名詞のそれを指す場合は「百科全書」の語を用い、一般名詞としては「百科事典」の語を用いる。
- (2) 鍾少華の研究は、かれの専著『人類知識的新工具——中日近代百科全書研究』（北京図書館出版社、1996年）にまとめられているほか、関連論文が同氏の文集『進取集——鍾少華文存』（中国国際広播出版社、1998年）に収録されている。
- (3) 研究プロジェクトの概要と関連情報、オンライン資料などは、Asia and Europe in a Global Context; D11 Hidden Grammars of Transculturality—Migrations of Encyclopaedic Knowledge and Power として、<http://www.asia-europe.uni-heidelberg.de/en/research/d-historicities-heritage/d11.html> で公開されているほか、中国との共同研究の成果が、陳平原、米列娜〔Milena Dolezelova-Velingerova〕主編『近代中国的百科辞書』（北京大学出版社、2007年）として刊行されている。
- (4) 近代以前の中国や日本の「類書」を「百科全書」（百科事典）の起源と見なすかどうかは確かに議論の残るところである。かつて杉本勲は、類書とは「あらゆる事項を分類し、その項目にあたる記述を他の諸書より抜きがきして一書に集めたものであったから、類書は事実上百科事典の役割をはたしてきたということができよう。この類書にたいして、百科のうちから一科ずつ選んで一部の書とし、これをいくつか集めて編集したものを叢書と呼ぶが、これは百科事典と一応区別して、いわば百科全書にあたるとみてもよいであろう」と述べ（杉本勲『近世実学史の研究』吉川弘文館、1962年、337-338頁）、「類書」「叢書」「百科事典」「百科全書」の近似性とその違いを指摘したが、近年では「類書」と「百科全書（事典）Encyclopaedia」とを区別する見解が根強い。詳しくは、前掲鍾少華『人類知識の新工具——中日近代百科全書研究』49-51頁、米列娜〔Milena Dolezelova-Velingerova〕「未完成的中西文化之橋——一部近代中国的百科全書（1911）」（前掲『近代中国的百科辞書』所収、136-137頁）など参照。

- (5) 『厚生新編』 厚生新編刊行会編刊、1937年。「厚生新編」の研究には、杉本つとむ編著『江戸時代西洋百科事典：『厚生新編』の研究』（雄山閣出版、1998年）がある。
- (6) 「百学連環」は、いま大久保利謙編『西周全集』第4巻（宗高書店、1981年）に収める。なお、「百学連環」の訳語については、狭間直樹・宮原佳昭両氏の作成した「西周『百学連環』訳語表データベース」があり、現在人間文化研究機構（大学共同利用法人）の nihINT データベース（<http://int.nihu.jp/>）及び京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター HP（<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/index.htm>）で公開されている。
- (7) 文部省版『百科全書』、およびそれを引き継いだ同書の有隣堂版、丸善書店版については、菊池重郎の先駆的研究（「文部省における「百科全書」刊行の経緯について」『日本建築学会論文報告集』61号、1959年）、福鎌達夫の網羅的研究（『明治初期百科全書の研究』風間書房、1968年）があり、当時としてはなし得る限りの資料博搜に基づく精緻な研究が行われている。その後、文部省版『百科全書』の原書となった *Chambers's Information for the People* の復刻（ただし、復刻された版本には問題が残る——後掲の注18参照）にさいして、松永俊男による解説冊子『チェンバーズ「インフォメーション」と文部省「百科全書」について』（Eureka Press、2005年）が刊行され、福鎌の研究の補訂も行われている。本稿の『百科全書』に関する書誌的事実についての記述は、主にこれらによるが、京都大学所蔵の各版によって適宜補訂する。
- (8) 石井研堂『明治事物起源』第4巻、筑摩書房、1997年、333頁（初版は橋南堂、1907年、増補改訂版は春陽堂、1944年）。
- (9) 吉井蒼生夫「西欧近代法の受容と箕作麟祥」神奈川大学人文学研究所編『『明六雑誌』とその周辺——西洋文化の受容・思想と言語』御茶の水書房、2004年。箕作の訳書目録、およびかれについての先行研究については、吉井論文に詳しいので、ここでは再掲しない。
- (10) 大槻文彦『箕作麟祥君伝』丸善、1907年、31頁。
- (11) 同前、88頁。
- (12) 同前、101頁。1887年9月に行われたこの演説は、注釈付きで加藤周一、丸山真男編『日本近代思想体系15 翻訳の思想』（岩波書店、1991年）に収録されている。
- (13) 「権利」「義務」の由来について言えば、「権利」がマーティン（W. Martin 中国名：丁韪良）による漢訳版『万国公法』に見えるのは確かだが、「義務」はそうではなく（松井利彦「漢訳『万国公法』の熟字と近代日本漢語」『国語と国文学』735号、1985年；金観濤、劉青峰『觀念史研究——中国現代重要政治術語の形成』香港：中文大学出版社、2008年、106-111, 502-504, 509-510頁）、なお検討を要する。鈴木修次『日本漢語と中国——漢字文化圏の近代化』（中央公論社、1981年）は、一節を割いて両語の由来を検討し、和製漢語の可能性を指摘しているが、箕作の演説については聞知していないようである。なお、本稿は特定の概念語・訳語の形成史を明らかにすることを目的とするものではないので、詳細の検討はしないが、この両語をはじめとする新漢語の研究状況については、李漢燮編『近代漢語研究文獻目録』（東京堂出版、2010年）が極めて有用である。
- (14) 穂積陳重『法窓夜話』有斐閣、1916年、164-165頁。
- (15) 箕作麟祥の関連資料としては、祖父阮甫のものと合わせた「箕作阮甫・麟祥関係文書」が国立国会図書館憲政資料室に保管されているが、「百科全書」編纂に関連するものは皆無と言ってよい。
- (16) 書誌学の面での研究については、前注7参照。また、文部省版「百科全書」を対象とした

語彙史研究には、例えば「教育／教導」を対象にしたもの（村瀬勉ほか「百科全書「教導説」の検討——箕作麟祥による「Education」の翻訳『職業能力開発総合大学校紀要』第35号B、2006年）のほかに、語彙全般を対象としたもの（高野繁男『近代漢語の研究——日本語の造語法・訳語法』明治書院、2004年、第3章『「百科全書」の語彙』）がある。

ちなみに、高野『近代漢語の研究』には、「社会」の語は清末西学の地理書『地球説略』（裨理哲〔Richard Quarterman Way アメリカの宣教師〕著、1856年刊——箕作阮甫の文久元年の訓点本あり）に見えるので、「和製漢語というより、中国語からの転用であろう」という説明がある（同書190頁）。『地球説略』で「社会」の語が出てくるのは、ロシアのギリシャ正教について述べた箇所、前後の文を合わせ示せば、「又教中之人、喜於多備彩旗燈燭、并諸色器具、各穿文繡衣服、持之周行於路、以為美觀、宛如中国社会一般」である（『地球説略』『小方壺輿地叢鈔再補編』第12帙、頁11b；和刻本：合衆国裨理哲著述、大日本箕作阮甫訓点『地理説略』中巻、頁40b）。一見して明らかなように、この箇所の「社会」は、ロシア正教で町を練り歩く行事の有様が、中国の「社」の「会」——つまりは「廟会＝お祭り」——のようだという意味であって、決してSocietyの意味ではない。「社会」の語は、翻訳概念語の中でも、とりわけ重要なもので議論されることも多いため、本稿とは直接の関係はないものの、一言する次第である。

- (17) なお、イギリスのChambersの百科事典というと、18世紀に刊行され、かのディドロらのフランス百科全書に影響を与えたイーフレーム・チェンバース（Ephraim Chambers）の『サイクロペディア』（*Cyclopaedia*, 1728）と混同されることがあるが、19世紀のチェンバース社とは無関係である。
- (18) 箕作らが翻訳にさいして用いた底本については、これまでイギリス版であることを前提に、様々な版本が想定され、諸説（注7、16参照）が乱立してきたが、いずれも正しくない。諸版を実際に比較検討すれば、底本はイギリス版ではなく、アメリカ版（*Chambers's Information for the People*, new and improved edition, 2 vols., Philadelphia: J. B. Lippincott & Co., 1867.）であることは明白である。このアメリカ版は、1856–58年に刊行されたと見られるイギリス版（new edition）を、ほぼそのまま印刷したものだが、一部の項目（例えば、Military and Naval Organisation）が最新の情報に基づいて、大きく書き換えられている。文部省「百科全書」の92項目、およびその一冊である『海陸軍制』の内容に完全に一致するのは、CIP諸版の中ではこのアメリカ版しかない。
- (19) 前掲村瀬勉ほか「百科全書「教導説」の検討」は、いくつかの可能性を検討している。
- (20) ゴーマス・C・フレッチェル著、緒方儀一訳『官版泰西農学』大学南校、明治3年（いま『明治後期産業発達史資料』第268巻、龍溪書舎、1995年に復刻版を収める）、巻下、「附言」。
- (21) もっとも、「学藝集成韻府」がチェンバースの事典（*Chambers's Encyclopaedia*, 10 vols., 1860–1868. ——アルファベット順に小項目が並ぶ百科事典）を指している可能性もある。「学藝集成」の語感から言えば、諸学科の説明をするCIPに近く、「韻府」の語感（分類配列）から言えば、*Encyclopaedia*に近いと言える。いずれにしても、百科全書（事典）の初期の訳語として「学藝集成韻府」なるものがあつたことは記しておいてもよいであろう。
- (22) このほかにも、福沢訳『童蒙教草』（1872年）がChambers's Educational Courseの*Moral Class-Book*（1839）の、また木幡篤次郎訳『博物新編補遺』（1869年）が同じく*Introduction to the Science*（1861）の翻訳であつたことが指摘されている（前掲松永俊男『チェンバース「インフォメーション」と文部省「百科全書」について』14–15頁）。また、*Political Economy for*



- Use in Schools, and for Private Instruction* は、在華宣教師フライヤー (John Fryer) によって漢訳され、江南製造局から『佐治芻言』(1885年)として刊行されている。
- (23) 分冊版の「百科全書」は青史社から復刻版(1983-1986年)が出ている。ただし、それぞれの分冊は必ずしも初版のものではないため、刊行年を知る上では注意が必要である。
- (24) 前掲福鎌『明治初期百科全書の研究』68-69頁。
- (25) ちなみに、慶應三年(1867)再版の『英和対訳袖珍辞書』は、Encyclopediaに「諸術及び性理を知る学の字書、諸学を集めたる字書」という説明を与え、明治6年の『英和字彙』は「節用集、学術字林」の語をあてている。
- (26) 日本において、デイドロらいわゆる「百科全書派」の業績を紹介した最初期の著作としては、ダイアー原著、嶋田三郎ほか訳『近世泰西通鑑』(第20巻、輿論社、1884年、210、219-220頁)があり、同書は「ヂデローが企図せし所の一大著述」を「政事類纂」と訳し、かれら一派を「エンサイクロペヂスト政事類纂派」と呼んでいた。明治後期になっても、「ヂデロー」らの「百科全書」に言及する書物がある(吉国藤吉『西洋歴史』博文館、1899年、187頁)一方で、「ヂドロ」らを「百科類典派」と呼び、その著作を「技藝商業科学百科辞典」とするもの(坂本健一編『世界史』下巻、博文館、1903年、1072頁)も併存していた。ちなみに、箕作麟祥の『万国新史』(東京玉山堂、1872年。フランス革命前史、およびルソーについての記述を含む)には、「百科全書派」への言及はなく、一方中江兆民『理学沿革史』(1886年)では、「ヂデローは「アンシクロペヂー」と号する学士会を創せし者の一人」となっている(『中江兆民全集』第6巻、岩波書店、1985年、60、73頁)。
- (27) 前掲大槻『箕作麟祥君伝』183、151頁に見える戸山正一、清水卯三郎の談話。
- (28) 『百科全書』丸善版(13冊本)「索引 凡例」。
- (29) 前掲石井『明治事物起源』第4巻、「百科全書の賃訳」333頁。
- (30) 前掲大槻『箕作麟祥君伝』120頁に見える黒田綱彦の談話。
- (31) 1876年制定の「文部省報告課編纂書籍取扱心得」の第4条に「文部省蔵板ノ書籍ハ一般ニ翻刻ヲ許スモノトス」とある(前掲菊池重郎「文部省における「百科全書」刊行の経緯について」)。
- (32) 泊翁西村茂樹先生伝記編纂会編『泊翁西村茂樹伝』日本弘道会、1933年、379頁。ちなみに、西村茂樹は文部省編書課長として「百科全書」の企画に参画し、自身もAstronomy(天文学)の翻訳をしている。なお、西村が後年語るところよれば、当時の文部省には「文明の諸国」にならない、政府が音頭をとって「学術の大辞典(エンサイクロペヂア)」を編むべしとする考えもあったが、如何せん「本邦の学問猶幼稚」ゆえ、仮に「一大類書を作りて今日の急に応じ」ることになったが、それがのちの『古事類苑』となったという(「往事録」『増補改訂 西村茂樹全集』第4巻、日本弘道会、2006年、463-464頁)。
- (33) 関根柔「百科全書序」『百科全書』第1冊(13冊版)、丸善、1883年。なお、丸善の経営史における「百科全書」の位置づけについては、『丸善百年史』上巻、丸善、1980年、195-203頁参照。
- (34) 中村正直「百科全書序」『百科全書』第2冊(13冊版)、丸善、1883年。
- (35) 前掲福鎌『明治初期百科全書の研究』67頁。
- (36) 前掲鍾少華『人類知識の新工具——中日近代百科全書研究』18-20頁、鄒振環「近代最早百科全書の編訳と清末文献中的狄德羅」『復旦学報』1998年第3期。近代中国における百科事典については、鄒振環氏のこの論文を皮切りとする一連の研究(とりわけ「近代“百科全書”

- 訳名的形成、変異与文化理解」『第四回漢字文化圏近代語研究会予稿集』2004年オンライン版 <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shkky/data/2004symp.pdf> が最も価値のあるものであり、本稿もかれの研究によるところが多い。
- (37)「日本書目志」が日本の書店取扱書籍目録をもとにしてまとめられたものであろうことは、ずいぶん前から言われていたが、その具体的な書目（東京書籍出版営業者組合員書籍総目録、1893年）を特定したのは、王宝平「康有為『日本書目志』出典考」（『汲古』57号、2010年）である。ちなみに「日本書目志」では、日本の百科事典類は「図史門 類書」「教育門 教育雑書」などに分類されている。
- (38)「日本書目志」巻4（『康有為全集』第3集、上海古籍出版社、1992年、738頁）。ここで「百科全書」と共に言及されている「普通学」とは、1890年代初めに東京の富山房が刊行した学習参考書シリーズの「普通学全書」のことで、「我自刊我叢書」とは、1880年代に東京の古書保存書屋なる書肆より刊行された『信長公記』などの和書復刻シリーズ（我自刊我書）のことである。ちなみに、「普通学全書」は後述する会文学社版『普通百科全書』の原著となるものである。
- (39) Adrian Arthur Bennett, *John Fryer: the Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China*, East Asian Research Center, Harvard University, 1967, pp. 84, 100；王揚宗「江南製造局翻訳書目新考」『中国科技史料』第16巻第2期、1995年。なおこのほかにも、魏易訳「選訳東西各国書報 教育史（英国百科全書原本）」（『学部官報』第4期、1906年）；王国維訳「選訳東西各国書報 欧洲大学小史（訳英国百科全書本）」（同第15期、1907年）；王国維訳「選訳東西各国書報 世界図書館小史（訳英国百科全書）」（同第91期、1909年）などの翻訳例がある。
- (40) 傅蘭雅〔Fryer〕「江南製造総局翻訳西書事略」『格致彙編』第3年第5巻、1880年。
- (41) 『飲冰室合集』中華書局、1936年、文集之一、55頁。
- (42) Encyclopaedia 概念の様々な漢訳語については、前掲鄒振環「近代“百科全書”訳名的形成、変異与文化理解」が詳しい。また後掲の注（70）も参照。
- (43) 石川暎作編『泰西政事類典』は、東京の経済雑誌社から1882年に24巻本が、1884-86年には縮刷合訂4巻本が刊行された。原著は、Henry G. Bohn, *The Standard Library Cyclopaedia of Political, Constitutional, Statistical and Forensic Knowledge, Forming a Work of Universal Reference on Subjects of Civil Administration, Political Economy, Finance, Commerce, Laws and Social Relations*, London: Henry G. Bohn, 1860, 4 vols. と見られる。なお、刊行元の経済雑誌社社主の田口卯吉は、『泰西政事類典』が文部省「百科全書」のように多数の訳者による共作ではなく、ほぼ石川の単独訳で仕上げられた点を大いに誇っていた（『予約刊行の盛衰』『東京経済雑誌』231号、1884年9月、いま『鼎軒田口卯吉全集』第8巻、大島秀雄刊、1929年、448頁に収む）。
- (44) 南方と『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の関係については、松居竜五ほか編『南方熊楠を知る事典』（講談社、1993年）171-172頁、ならびに小山騰「南方熊楠と英国の日本学」（田村義也、松居竜五編『南方熊楠とアジア』勉誠出版、2011年）参照。
- (45) 関連部分の原文は以下の通り。「狄氏少学于教会小学、後入中学、精数学及外国語、訳英文百科類典、即本之起草、為本国文類典、有名当時」。
- (46) 楊家駱『狄岱麓與李石曾』世界書局、1946年、3頁；李煜瀛・楊家駱主編『世界学典 四庫全書学典』世界書局、1946年、巻、119頁。

- (47) 李煜瀛「世界学典書例答問」、前掲『世界学典 四庫全書学典』1頁。ちなみに李は、「全書」では四庫全書のような叢書式全書と混同される恐れがあるとして、のちに「類典」に代わって「学典」の訳語を提唱し、世界規模の協力体制による気宇壮大な「世界学典」を構想した。ただし、在野の書誌学者の楊家駱を引き入れて部分的に実行したその試みは、『世界学典 四庫全書学典』を出しただけで終わった模様である。李の構想については、同書所収の「世界学典書例答問」、および前掲楊家駱『狄岱麓與李石曾』参照。
- (48) さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版、1960年、268-272頁。
- (49) 熊月之『西学東漸与晚清社会』（上海人民出版社、1994年、646-651頁；同修訂版、中国人民大学出版社、2011年、515-520頁）；鄒振環『訳林旧踪』江西教育出版社、2000年、112-115頁；同『20世紀上海翻訳出版与文化変遷』広西教育出版社、2000年、75-81頁。また、鄒振環『晚清西方地理学在中国』（上海古籍出版社、2000年）の付録「晚清西方地理学訳著知見録」には、地理学関連書の書誌情報が載っている。
- (50) 『普通百科全書』「編訳百科全書題名」。
- (51) 朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』学林出版社、1993年、234頁。なお、『普通百科全書』に附された「欽命二品頂戴江南分巡蘇松太兵備道袁為給示諭禁事」によれば、会文学社は新田和約や各地の礦務章程をはじめとする章程類など各種の叢書を編輯する予定であったから、同社はそもそもこうした政務関連の大型の叢書や教科書の発行をするために設立されたとも考えられる。
- (52) 『普通百科全書』李思慎序（光緒癸卯〔1903年〕春正月）。
- (53) 『普通百科全書』「本書之内容」。
- (54) 富山房編刊『富山房五十年』1936年、489-490頁。
- (55) 坪谷善四郎『博文館五十年史』博文館、1937年、127-128頁。
- (56) 大町芳衛『日本文明史』（帝国百科全書第101編）博文館、1903年、巻末広告。
- (57) 『普通百科全書』湯寿潜序、鄭紹謙序。
- (58) 『普通百科全書』「本書之内容」。
- (59) 国外の状況については、上海図書館に1セットが所蔵されているという（前掲『進取集——鍾少華文存』81頁）が、筆者はそれを確認できなかった。筆者は、早稲田大学中央図書館の蔵本（請求記号イ4-1408）のほか、ハイデルベルグ大学のGotelind Müller-Saini教授のはからいで、同大学の研究プロジェクト（本稿注3参照）の収集にかかるデジタル版を参照した。早稲田大学蔵本の存在を教示していただいた千葉謙悟氏とMüller-Saini氏には、厚く御礼申し上げる。
- (60) この広告は、復刻版の『遊学訳編』（中華民国史料叢編〔台北、1968年〕、湖湘文庫〔長沙、2008年〕）には見えず、上海図書館所蔵の原本に見えるものである。この広告を紹介した鄒国義「梁啓超新史学思想探源」（『社会科学』2006年第6期）の7頁注③によれば、広告文の全文は以下のとおり。「我国学界之幼稚、其原因雖不一、然不知普通学為病根之根。本社有慨於是、特将日本富山房最新最善之普通学全書開訳、以供我国普通学教科書之用、有志教育国民者当必先睹為快也。東新訳社告白」。ただし、この広告に言う富山房の普通学全書とは、『普通百科全書』の普通学類の原著となったものだが、「東新訳社」は『遊学訳編』（湖南系）系列の団体であるから、『普通百科全書』の翻訳を担った「東華訳社」とは別物なのかも知れない。もし別物だとすれば、この時期に富山房の普通学全書を翻訳する二つの計画があったことになる。

- (61) 前掲『進取集——鍾少華文存』81頁；前掲鍾『人類知識の新工具——中日近代百科全書研究』75-76頁。
- (62) 『西学啓蒙十六種』については、前掲熊月之『西学東漸与晚清社会』修訂版、381-385頁参照。
- (63) 『新学大叢書』は『新民叢報』などに発表されたいわゆる「新学」に分類される文章を10分野にわけて集成、編纂したものである。梁啓超編とされることが多い（前掲鍾『人類知識の新工具——中日近代百科全書研究』76頁；孫青『晚清之“西政” 東漸及本土回応』上海書店出版社、2009年、233-235頁）。
- (64) 今、周振鶴編『晚清營業書目』（上海書店出版社、2005年）に収める（238-239頁）。
- (65) 『普通百科全書』に見える固有名詞の翻訳については、近年研究がはじまっており、地名などの音訳語にも、日本語の影響があるという指摘がなされている（千葉謙悟『中国語における東西言語文化交流——近代翻訳語の創造と伝播』三省堂、2010年、129-140頁）。
- (66) 『丸善百年史』上巻、丸善、1980年、618頁。
- (67) 以上の数字は同上、496-500, 584-585, 615-617頁による。
- (68) 大町芳衛『日本文明史』（帝国百科全書第101編）博文館、1903年、巻末広告。
- (69) 前掲『丸善百年史』上巻、585頁。
- (70) 『ブリタニカ』を一種の「図書集成」だとする説明は、中国の知識人向けの一種の方便なのかも知れないが、内容紹介の項目でも「宗教の全集」「音楽と戯曲の全集」「法律の全集」など「○○の全集」という言葉が羅列してあり、あらゆる分野の著作大全集であるかの印象を与えているのも確かである（天津『大公報』1906年12月8, 10日広告）。当時の「百科全書」がどのようなものを連想させたかを示す一例であろう。ちなみに、これより先1903年に上海で『ブリタニカ』（第10版）の販売が行われた時（広学会が取扱い）に『申報』が掲載した広告も、書名を『全球図書総集成』と表記していた（例えば、1903年4月1日）。
- (71) 鄧紹根「記《大不列顛百科全書》在中国的首次銷售」『出版發行研究』2004年第2期。ちなみに同じ時期に広告の出た『古今圖書集成』（商務印書館取扱、上海圖書集成局版と見られる）は銀400両で、『ブリタニカ』の二倍の値だった。
- (72) 天津『大公報』1907年1月11, 13日広告。
- (73) 同上1907年1月4, 6日広告。
- (74) 同上1907年6月3, 4日広告。
- (75) 同上1907年9月23, 28日広告。この広告によれば、優待価格（半額）販売は、11月15日で打ち切りであった。
- (76) 『申報』1907年1月27日広告。
- (77) 同上1月30日, 2月16日広告。
- (78) 同上3月10日広告。
- (79) 同上3月20, 27日, 4月1, 22日, 5月28日広告。
- (80) 同上4月8, 30日広告。
- (81) 同上11月19日広告。
- (82) 『大英百科全書評論』については未見であるが、前掲陳平原、米列娜主編『近代中国的百科辞書』所収論文が言及している（代序6-7頁, 162-163頁）。
- (83) 王忭主編『嚴復集』（中華書局、1986年）には、中国歴史博物館所蔵の手書き原稿「書《百科全書》」なる文章が収録されている（第2冊、251-252頁）が、『寰球中国学生報』所載の「英

文百科全書評論」とは、かなり内容が異なる。「書《百科全書》」は「英文百科全書評論」の下書き原稿ではないかと見られる。

- (84)「智環」の語は、西周の「百学連環」と同じく、Encyclopaedia が持っていた「環」+「学」の原義を尊重したものであろう。日中における西学の先駆者が共に相似た語を用いたのは興味深いことである。ちなみに、1856年に中国で刊行され、その後に日本にも伝入した初級英語教科書（総合啓蒙書）も『智環啓蒙』『智環啓蒙塾課初歩』というタイトルであった（沈国威、内田慶市『近代啓蒙の足跡——東西文化交流と言語接触：『智環啓蒙塾課初歩』の研究』関西大学東西学術研究所、2002年）。また、「学郢」の語については、明初の叢書『説郢』を念頭においたものだろうという説がある（前掲陳平原、米列娜主編『近代中国的百科辞書』163-165頁）。
- (85) 表題に「百科全書」とつけつつも、厳復が本文の中で一貫して「智環」を用い、「百科全書」の語を使わなかったことには、Encyclopaedia は図書集成の如き全書とは違うのだというかれの考えがあらわれているのかも知れない。
- (86) 前掲鄧紹根「記《大不列顛百科全書》在中国的首次銷售」。また、近代日中の百科事典そのものの比較をする鍾少華氏も同様の理由を提示している（前掲鍾『人類知識の新工具——中日近代百科全書研究』148-156頁）。
- (87) なお、この広告には「発売4カ月にして上海、天津などで400部が売れた」とある。
- (88) 先「英国百科全書書後」『申報』1907年2月6日。
- (89) 当時、中国の現場で『ブリタニカ』販売を直接に目にしたタイムズ特派員のモリソン(G. E. Morrison)はロンドンの知人に、「〔中国での〕英語の普及には目を見張ることでしょう。今や中国人は『ブリタニカ』でさえ購入しているのです。……中国を非難するさいには、この帝国では今や英語をちゃんと読み、理解できる人が何千何万もいるということを知っておくべきです」と告げていた（“Morrison's letter to V. Chirol (Peking, 14 May 1907)”, in: Lo Hui-Min ed., *The Correspondence of G. E. Morrison*, vol. 1, Cambridge University Press, 1976, p. 410）。すなわち、モリソンにしてみれば、中国人は決して英語やそれを通じて得られる西洋の知識に無関心なのではなく、『ブリタニカ』がある程度売れているということ自体が驚きであり、中国の変化の兆しだったのである。
- (90) 「論新名詞輸入與民德墮落之關係」『申報』1906年12月13日（『東方雜誌』3巻12号〔1907年1月〕に転載）。なお、1905年に創刊した『国粹学報』も創刊号の「例言」で、「本報撰述、其文体純用国文風格、一洗今日東瀛文体粗浅之惡習」と謳っていた。
- (91) 『ブリタニカ国際大百科事典』TBS ブリタニカ社、1973-1975年。
- (92) 『簡明不列顛百科全書』中国大百科全書出版社、1985-1986年；『不列顛百科全書』中国大百科全書出版社、1999年。

## 附表

## 普通百科全書目録

| 編目             | 巻名      | 葉数   | 原著者             | 原典                  | 原著<br>刊行年  | 備考                      |
|----------------|---------|------|-----------------|---------------------|------------|-------------------------|
| 初級学類 (初級学歴史類)  | 帝国歴史問答  | 87*  | 富山房編            | 普通学問答全書04           | 1894       | 富山房原書名: 支那歴史問答          |
| 初級学類 (初級学歴史類)  | 日本歴史問答  | 113* | 富山房編            | 普通学問答全書03           | 1894       |                         |
| 初級学類 (初級学歴史類)  | 世界歴史問答  | 126* | 富山房編            | 普通学問答全書05           | 1894       |                         |
| 初級学類 (初級学地理類)  | 日本地理問答  | 124* | 富山房編            | 普通学問答全書01           | 1894       |                         |
| 初級学類 (初級学地理類)  | 世界地理問答  | 121* | 富山房編            | 普通学問答全書02           | 1894       |                         |
| 初級学類 (初級学地文類)  | 地文学問答   | 91*  | 富山房編            | 普通学問答全書10           | 1895       |                         |
| 初級学類 (初級学生理学類) | 生理学問答   | 97*  | 富山房編            | 普通学問答全書16           | 1896       |                         |
| 初級学類 (初級学教育類)  | 教育学問答   | 78*  | 富山房編            | 普通学問答全書07           | 1895       |                         |
| 初級学類 (初級学教育類)  | 教授法問答   | 74*  | 富山房編            | 普通学問答全書09           | 1895       |                         |
| 初級学類 (初級学教育類)  | 学校管理法問答 | 80*  | 富山房編            | 普通学問答全書08           | 1895       |                         |
| 初級学類 (初級学哲学類)  | 論理学問答   | 69*  | 富山房編            | 普通学問答全書18           | 1896       |                         |
| 初級学類 (初級学理化類)  | 物理学問答   | 100* | 富山房編            | 普通学問答全書13           | 1896       |                         |
| 初級学類 (初級学理化類)  | 化学問答    | 34   | 富山房編            | 普通学問答全書14           | 1896       |                         |
| 初級学類 (初級学動植物類) | 動物学問答   | 95*  | 富山房編            | 普通学問答全書11           | 1896       |                         |
| 初級学類 (初級学動植物類) | 植物学問答   | 85*  | 富山房編            | 普通学問答全書12           | 1896       |                         |
| 初級学類 (初級学鉱物類)  | 鉱物学問答   | 84*  | 富山房編            | 普通学問答全書19           | 1898       |                         |
| 初級学類 (初級学数理類)  | 数理問答    | 114* | 富山房編            | 普通学問答全書15           | 1896       |                         |
| 普通学類 (普通学歴史類)  | 帝国新歴史   | 113* | 富山房編            | 富山房普通学全書21          | 1892       | 富山房原書名: 支那新歴史           |
| 普通学類 (普通学歴史類)  | 万国新歴史   | 138* | 富山房編            | 富山房普通学全書05          | 1891       |                         |
| 普通学類 (普通学天文類)  | 気中現象学   | 59*  | 小林義直訳           | 文部省百科全書             | 初刻<br>1876 |                         |
| 普通学類 (普通学天文類)  | 時学及時刻学  | 9    | 河村重固訳           | 文部省百科全書             | 初刻<br>1876 |                         |
| 普通学類 (普通学地理類)  | 普通日本地理  | 130* | 山上万次郎           | 『新撰普通地理<br>日本之部』富山房 | 1897       | 表紙のみ「日本旅行地理」            |
| 普通学類 (普通学地理類)  | 万国旅行地理  | 108* | 山上万次郎           | 『新撰普通地理<br>外国之部』富山房 | 1897       |                         |
| 普通学類 (普通学地理類)  | 万国地理新書  | 11   | 田辺新之助           | 富山房普通学全書20          | 1892       | 表紙のみ「万国地理」              |
| 普通学類 (普通学地文類)  | 地文学新書   | 91*  | 富山房編            | 富山房普通学全書25          | 1894       |                         |
| 普通学類 (普通学教育類)  | 教育学新書   | 105* | 富山房編            | 富山房普通学全書27          | 未詳         |                         |
| 普通学類           | 物理学新書   | 81*  | 富山房編            | 富山房普通学全書02          | 1891       |                         |
| 普通学類 (普通学動植物類) | 動物通解    | 288* | 岩川友太郎等          | 文部省編輯局              | 1887       |                         |
| 普通学類 (普通学動植物類) | 動物学新書   | 8    | 八田三郎            | 富山房普通学全書24          | 1892       | 表紙のみ「動物新書」              |
| 普通学類 (普通学動植物類) | 植物学新書   | 66*  | 岡村金太郎編          | 富山房普通学全書12          | 1891       |                         |
| 普通学類 (普通学鉱物類)  | 鉱物学新書   | 67*  | 富山房編            | 富山房普通学全書17          | 1891       |                         |
| 普通学類 (普通学美術類)  | 美術新書    | 64*  | 富山房編            | 富山房普通学全書10          | 1891       |                         |
| 普通学類 (普通学数学類)  | 初等算術新書  | 23   | 富山房編            | 富山房普通学全書09          | 1892       | 表紙のみ「算術新書」              |
| 普通学類 (普通学数学類)  | 代数学新書   | 24   | 坂本嘉活馬編          | 富山房普通学全書14          | 1891       | 富山房原書名: 初等代数学新書         |
| 普通学類 (普通学数学類)  | 初等幾何学新書 | 26   | 富山房編            | 富山房普通学全書07          | 1891       | 表紙のみ「幾何学新書」             |
| 普通学類 (普通学数学類)  | 簡易測図法   | 16   | 白幡郁之助           | 千城社                 | 1892       |                         |
| 普通学類 (普通学数学類)  | 測量速成    | 61*  | 小船井理吉           | 果枝堂                 | 1889       | 果枝堂原書名: 測量早学            |
| 普通学類 (普通学数学類)  | 野線学     | 27   | 海野力太郎           | 経済雜誌社               | 1888       |                         |
| 専門学類 (専門学政治類)  | 政治汎論    | 17   | 永井惟直            | 帝国百科全書47            | 1900       |                         |
| 専門学類 (専門学政治類)  | 政治史     | 22   | 森山守次            | 帝国百科全書46            | 1900       |                         |
| 専門学類 (専門学政治類)  | 財政学     | 16   | 笹川潔             | 帝国百科全書31            | 1899       |                         |
| 専門学類 (専門学政治類)  | 議會及政党論  | 9    | 菊池学而            | 帝国百科全書80            | 1902       |                         |
| 専門学類 (専門学経済類)  | 経済汎論    | 13   | 池袋秀太郎           | 帝国百科全書70            | 1901       |                         |
| 専門学類 (専門学経済類)  | 商業経済学   | 12   | 清水泰吉            | 帝国百科全書38            | 1899       |                         |
| 専門学類 (専門学経済類)  | 税関及倉庫論  | 23   | 岸崎昌             | 帝国百科全書44            | 1900       |                         |
| 専門学類 (専門学法律類)  | 法律汎論    | 14   | 熊谷直太            | 帝国百科全書16            | 1898       |                         |
| 専門学類 (専門学法律類)  | 国法学     | 23   | 岸崎昌・<br>中村孝     | 帝国百科全書56            | 1900       |                         |
| 専門学類 (専門学法律類)  | 国際公法    | 14   | 北條元篤・<br>熊谷直太訳補 | 帝国百科全書23            | 1899       | ウィリヤム・エドワード・<br>ホール 等原著 |
| 専門学類 (専門学法律類)  | 国際私法    | 18   | 中村太郎            | 帝国百科全書22            | 1898       |                         |
| 専門学類 (専門学法律類)  | 日本帝国憲法論 | 10   | 田中次郎            | 帝国百科全書33            | 1899       |                         |
| 専門学類 (専門学法律類)  | 商法汎論    | 8    | 添田敬一郎           | 帝国百科全書29            | 1899       |                         |

## 普通百科全書目録

| 編目           | 巻名             | 葉数   | 原著者            | 原典       | 原著<br>刊行年 | 備考                  |
|--------------|----------------|------|----------------|----------|-----------|---------------------|
| 専門学類（専門学法律類） | 民事訴訟法釈義        | 13   | 梶原仲治           | 帝国百科全書26 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学法律類） | 行政裁判法論         | 14   | 小林魁郎           | 帝国百科全書86 | 1902      |                     |
| 専門学類（専門学法律類） | 民法総則編物権編<br>釈義 | 13   | 丸尾昌雄           | 帝国百科全書30 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学法律類） | 民法親族編相続編<br>釈義 | 11   | 上田豊            | 帝国百科全書21 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学法律類） | 民法債権編釈義        | 14   | 丸尾昌雄           | 帝国百科全書43 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学法律類） | 日本法制史          | 45   | 三浦菊太郎          | 帝国百科全書51 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学法律類） | 運送法            | 9    | 菅原大太郎          | 帝国百科全書49 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学法律類） | 船舶論            | 9    | 赤松梅吉           | 帝国百科全書58 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学哲学類） | 哲学汎論           | 9    | 藤井健治郎訳         | 帝国百科全書35 | 1899      | フォン・キルヒマン原著         |
| 専門学類（専門学哲学類） | 西洋哲学史          | 11   | 蟹江義丸           | 帝国百科全書32 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学哲学類） | 宗教哲学           | 8    | 姉崎正治訳          | 帝国百科全書05 | 1898      | ハルトマン原著             |
| 専門学類（専門学哲学類） | 世界宗教史          | 9    | 加藤玄智訳述         | 帝国百科全書67 | 1901      | アラン・メンジース原著         |
| 専門学類（専門学哲学類） | 東西洋倫理学史        | 13   | 木村鷹太郎          | 帝国百科全書03 | 1898      | 博文館原書名：東洋西洋倫理<br>学史 |
| 専門学類（専門学歴史類） | 日本歴史           | 45   | 木寺柳次郎          | 帝国百科全書25 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学歴史類） | 西洋歴史           | 83*  | 吉国藤吉           | 帝国百科全書41 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学歴史類） | 支那文明史          | 10   | 白河次郎・<br>国府種徳  | 帝国百科全書52 | 1900      | 表紙のみ「帝国文明史」         |
| 専門学類（専門学歴史類） | 日本風俗史          | 19   | 坂本健一           | 帝国百科全書48 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学歴史類） | 支那文学史          | 101* | 笹川種郎           | 帝国百科全書09 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学歴史類） | 東洋歴史           | 92*  | 幸田成友           | 帝国百科全書85 | 1902      |                     |
| 専門学類（専門学地理類） | 日本新地理          | 58   | 佐藤伝蔵           | 帝国百科全書02 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学地理類） | 万国新地理          | 101* | 佐藤伝蔵           | 帝国百科全書08 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学地理類） | 商工地理学          | 24   | 永井惟直           | 帝国百科全書36 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学数学類） | 新撰三角法          | 10   | 松村定次郎          | 帝国百科全書62 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学理学類） | 有機化学           | 8    | 亀高德平           | 帝国百科全書63 | 1901      |                     |
| 専門学類（専門学理学類） | 無機化学           | 13   | 真島利行           | 帝国百科全書65 | 1901      |                     |
| 専門学類（専門学理学類） | 植物学新論          | 10   | 飯塚啓            | 帝国百科全書72 | 1901      |                     |
| 専門学類（専門学理学類） | 地質学            | 8    | 佐藤伝蔵           | 帝国百科全書18 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学理学類） | 星学             | 8    | 須藤伝次郎          | 帝国百科全書60 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学工学類） | 分析化学           | 12   | 内藤游・<br>藤井光蔵   | 帝国百科全書42 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学工学類） | 応用機械学          | 7    | 重見道之           | 帝国百科全書71 | 1901      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 農学汎論           | 12   | 恩田鉄弥           | 帝国百科全書10 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 農業経済学          | 8    | 横井時敬・<br>沢村真   | 帝国百科全書69 | 1901      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 植物營養論          | 11   | 稲垣乙丙           | 帝国百科全書14 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 気候及土壤論         | 15   | 佐々木祐太郎         | 帝国百科全書39 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 肥料学            | 14   | 木下義道           | 帝国百科全書04 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 微生物学           | 10   | 井上正賀           | 帝国百科全書57 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 日用化学           | 8    | 井上正賀           | 帝国百科全書28 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 農用器具学          | 7    | 西村栄十郎          | 帝国百科全書61 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 農産製造学          | 11   | 楠巖             | 帝国百科全書07 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 栽培汎論           | 9    | 横井時敬           | 帝国百科全書13 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 栽培各論           | 12   | 田中節三郎          | 帝国百科全書68 | 1901      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 畜産汎論           | 10   | 高見長恒           | 帝国百科全書53 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 畜産各論           | 13   | 田口晋吉           | 帝国百科全書54 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 農芸化学           | 11   | 井上正賀           | 帝国百科全書76 | 1901      |                     |
| 専門学類（専門学農学類） | 土地改良論          | 9    | 上野英三郎・<br>有働良夫 | 帝国百科全書81 | 1902      |                     |
| 専門学類（専門学森林類） | 提要造林学          | 10   | 本多静六           | 帝国百科全書37 | 1899      |                     |
| 専門学類（専門学森林類） | 森林学            | 16   | 奥田貞衛           | 帝国百科全書20 | 1898      |                     |
| 専門学類（専門学森林類） | 森林保護学          | 9    | 新島善直           | 帝国百科全書55 | 1900      |                     |
| 専門学類（専門学教育類） | 教育学            | 10   | 熊谷五郎           | 帝国百科全書74 | 1901      |                     |

葉数の\*印は全訳、あるいはほぼ全訳であることを示す